幼児の言語発達に関する研究

研究第5部　望　月　武　子
丸　尾　あ　き　子

I　目　　的

先に、幼児の言語発達を品詞の出現および、その使用状況、文の構造などからみてきたが、今回は、幼児の言語を機能的な面から分析して、コミュニケーションの手段としての言語について、発達の実態をとらえるとともに、子どもが対人関係の中で、ことばをいかに使用し、習得していくか、その過程を探ろうとした。

II　方　　法

1.　対　象

幼児の言語発達に関する研究――構文の発達――（研究所紀要第4集）と同じ資料を用いた。

すなわち、愛育病院の保健指導部で継続指導中の子どもの中から、1才、1才6か月、2才、2才6か月、3才の幼児各20名を選定して研究対象とした。子どもの選定にあたっては、あらかじめカルテにより、未熟児や著しい発達遅滞を伴なうと認められるもの、母親が家庭外で職業に従事しているものを除外した。そして、各年令段階とも男女各10名ずつ、その内訳は一人っ子4名、兄の1名あるもの3名、姉の1名あるもの3名とした。ただし、3才児は録音の不調その他の理由で考察の対象になったものは11名である。

2.　調査方法

対象児の家庭を個々に訪問し、家庭内の自由遊びの場面で話されたことばをテープレコーダーにより収録する方法を用いた。この場合、録音時間は15分に定め、あらかじめ母親に対しては平常と変わらぬ態度で子どもに接するように依頼した以外、録音時の遊びの内容、場面に参加する人などについては特に限定しなかった。記録者は訪問後20～30分ぐらい、母親から家族構成や子どもへの接し方など家庭の状況を聴取したり、子どもの遊びに応じたりするなどして、子どもとのラポートの成立につとめ、子どもが平常の状態になった時に録音を開始した。また、記録者側から子どもへの積極的な働きかけはさけ、子どもからの働きかけには自然に応ずる態度を保つよう努めた。

3.　整理方法

上記のような条件のもとで収録されたことばをすべて文字化し、そのうち子どもの発した有意味語だけをとりあげ、文単位に区分して、次の諸点から分析した。

1）聞きてが子どものことばの意味を理解できる程度により3項目に分類した。

a　理解可能な言語

聞きてが、そのことばを発した場面や状況などを手がかりに加えなくても有意味語と認めることができることばであって、成人語および一般に使用される幼児語が含まれている。

b　理解不可能な言語

母親など、子どもと密接な関係のある聞きてだけには意味を理解できるが、一般的には意味を理解することが困難なことばや、場面、状況などから推測して意味が理解できることばであって、次のようなものが含まれている。

イ）喃語的なもの
ロ）単語の音の一部だけをいうもの
ハ）一般的でない擬声語
ニ）一般的でない幼児語（家庭語）
ホ）構音能力が未発達のため著しく歪曲された成人語および幼児語

c　一部理解可能な言語

a，bの組みあったものを分類した。

2）言語が対人関係において、伝達の機能をもつかどうかという点から、大きく三つに分類した。

a　相手に表現・伝達の意図をもたない言語（無意図）反響語や独語、感嘆語（アラ・ワーなど）などことば

として投げかけられるが、相手に伝達しようとする意図がなく、したがって、相手からの応答を期待しないことばをこの中へ入れた。

b　子ども側から相手に対し、新たに何かを表現・伝達しようとする意図をもつ言語（表現）

子どもの側から能動的に話し始められたことばで、命令、質問などのように相手に伝達しようとする意図があり、相手の応答を期待していることばを分類した。

c　相手側からの話しかけに対し、何かを表現、伝達しようとする意図をもつ言語（応待）

相手側からの言語的働きかけに対して応ずることばで、応答、口まねなどを分類した。

3)　2）の項目をさらに次のように小さく分類した。

a　反響語
b　独語（集団的独語を含む）
c　口まね
d　呼びかけ
e　命名（指示）
f　説明
g　連想
h　主張
i　批評
j　命令・要求
k　情緒的言語
l　質問
m　応答(相手からの質問に対する応答だけに限った)
n　その他

Ⅲ　結　　果

1.　各年令段階の発達

1)　1才児

周囲のおとなの話しかけをじっと聞いたり、おとなのことばの音をまねしたりする態度が現われている。簡単なことばの理解が可能になり、相手のことばに応じて、傍へ来たり、持っているものを手渡したり、指示された物の方をみたりするなど、行動で反応を示すようになって来ている。しかし、子ども側に理解できる内容はきわめて限られており、母親の働きかけに全く反応しなかったり、まちがった反応をすることがかなり多い。したがって、表情、身ぶりなど言語外の手段で補われたり、子どもが反応を示すまで反覆して働きかけられたり、子どもの反応を支持したり、訂正することにより、かろうじてコミュニケートできる場面もみられる。

ことばの使用の面からみると、有意味語の発生をみない子どもが4名あったが、他は有意味語が表われ始めている。第1表に示したように、理解可能な言語が数回使用されている。その内容はワンワン、ブーブ、ママなどの一般的な幼児語が大部分であり、理解不可能な言語には、犬を“ウーッ„やかんを“アジュジュ„など一般的でない幼児語や、単語の中の一部の音だけを発するもの、喃語に近いことばを周囲のおとなが意味をもったことばとして取りあげているような場合が含まれる。したがって、親の側はことばとして意味づけて、子どもに反応を返してはいるが、子ども自身にはことばの意味が理解されているかどうか不明瞭なものもあり、有意味語として位置づけるには疑問のあるものも含まれている。

このように、有意味語の出現は僅かにみられるが、ことばが伝達の機能をもって使用されることはきわめて少ない。使用されたことばを機能別にみると、第2表に示したように、おとなのことばの音を模倣する反響語が最も多く、また、発声を楽しむような独語が多い。

一方、伝達の意図をもつことばは、語数にして1～2語程度ではあるが、一部の子どもに使用されており、命令、命名、呼びかけ、応答などの機能をもつことばがあらわれている。しかし、ワンワン、ブーブなど、いずれも眼前にあるその対象を指示しながら、あるいは指示されて、その名をくり返すという表現形式をとり、眼前に対象がないと発語しにくい。また、一語文であるため、聞きては子どもの示す音調、表情、動作など、言語外の伝達手段や、ことばが発せられた場面の状況などを手がかりに加えないとその意味を理解することがむずかしい。

第1表　聞きての理解度からみた1才児のことば

理解度	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %
理解可能	7.4	87.1	6.2	96.9
理解不可能	1.1	12.9	0.2	3.1

2)　1才6か月児

すべての子どもにことばの使用がみられる。使用語数は増加してきて理解可能な言語がふえているが、一方、理解不可能な言語の割合も増加している。(第3表)

バスを“バ„電車を“チャ„などのように単語の初め

第2表　機能別にみた1才児のことば

伝達の機能		男 平均使用頻数	男 %	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %	女 平均使用頻数	女 %
無意図	反響語	6.3	74.1	3.3	38.8	4.3	67.2	2.9	45.3
	独　語			3.0	35.3			1.3	20.3
	その他							0.1	1.6
表　現	呼びかけ	0.4	4.7			1.3	20.3	0.4	6.3
	命　名			0.1	1.2			0.3	4.7
	命　令			0.3	3.5			0.6	9.4
応　待	口まね	1.8	21.2	0.4	4.7	0.8	12.5		
	命　名							0.2	3.1
	応　答			1.4	16.5			0.5	7.8
	その他							0.1	1.6

第3表　聞きての理解度からみた1才6か月児のことば

理解度	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %
理解可能	33.6	81.0	48.8	88.2
理解不可能	6.8	16.4	5.8	10.5
一部理解可能	1.1	2.7	0.7	1.3

の音や語尾だけをいうものや、音の省略、転化などが目だち、ジュー（すべり台）ポップ（ドロップ）デンデン（電車）のように一般的には通用しにくい家庭語の使用がみられる。

第4表に示したように、伝達の意図をもたない言語の割合が減少し、対人関係の中でことばが使用されてきている。しかし、ことばは出ていても、伝達の目的では使用されていないものが1名あった。

第4表　機能別にみた1才6か月児のことば

伝達の機能		男 平均使用頻数	男 %	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %	女 平均使用頻数	女 %
無意図	反響語	11.8	28.4	2.0	4.8	3.5	6.3	0.8	1.4
	独　語			9.8	23.6			2.2	4.0
	その他							0.5	0.9
表　現	呼びかけ	13.1	31.6	3.0	7.2	26.3	47.6	8.9	16.1
	命　名			4.5	10.8			5.9	10.7
	説　明			0.4	1.0			3.1	5.6
	命　令			5.1	12.3			6.4	11.6
	情緒的							1.5	2.7
	その他			0.1	0.2			0.5	0.9
応　待	口まね	16.6	40.0	2.3	5.5	25.5	46.1	7.7	13.9
	応　答			11.6	28.0			17.3	31.3
	情緒的			1.9	4.6			0.1	0.2
	その他			0.8	1.8			0.4	0.8

伝達の意図のない言語では、発声を楽しむような独語、反響語が減少し、独語の中に分類した、動作や遊びに伴なって発する擬声が大きな割合を占めている。

伝達の意図をもつ言語では、命令、呼びかけなど、子どもの要求と結びついたものが多く、ほとんどの場合、眼前の事象を介して、ことばが使用されている。物の名を学習していくうえで、重要な役割をもつと考えられる命名、指示の機能をもつことばはこの時期から増加がみられる。また、事物の命名から一歩すすんで、アッチイッタ、ババノ(鉛筆をさして)、アカチャンノダ（小さくできたシャボン玉をみて)、など説明的な叙述が僅かにみられる。

一方、ことばの意味理解がすすみ、周囲の人々の話しかけにことばで応じる態度があらわれてきて、眼前のものを介して親から子へ、子から親へという簡単な会話が成立する。しかし、絵本や玩具を示して働きかけても全く無視して応じない場面も多い。応答内容は、周囲からの話しかけにハイ、ウンと応じるほか、眼前の物を指示して「これはなーに」と質問されるのに対し、単語で答えたり、おとなの要求に応じて相手のいったことばをまねる口まねなどがある。一部に、「昨日はどこいったの」「この間ママと何にのったの」など眼前の事象から離れての会話が可能になっているものがある。

3)　2才児

第5表に示したように、使用語数の著しい増加がみられるが、まだ一般には通用しにくいことばが多い。理解不可能な言語の中には、構音能力が不充分なもののほか、ウーウーゴンゴン（汽車）ニューニュー（ヘビ）エーッサッサ（郵便や）など、その子ども独特の擬声語、擬態語がある。

ことばの習得期で、特に物の名を覚える時期にあるためか、おとなから積極的な働きかけが多く、絵本、玩具を提示しながら、子どもに話させようとする意図が強い。したがって、相手のことばに対し応待することばの割合が各発達段階を通じて最も多くなっている。特に、

第5表　聞きての理解度からみた2才児のことば

理解度	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %
理解可能	105.6	84.1	84.2	84.7
理解不可能	13.7	10.9	10.8	10.9
一部理解可能	6.2	4.9	4.4	4.4

第6表　機能別にみた2才児のことば

伝達の機能		男 平均使用頻数	男 %	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %	女 平均使用頻数	女 %
無意図	反響語	22.3	17.8	2.0	1.6	9.8	9.9	0.6	0.6
	独語			16.0	12.8			7.3	7.3
	情緒的			4.3	3.4			1.9	1.9
表現	呼びかけ	39.6	31.6	1.8	1.4	34.0	34.2	2.7	2.7
	命名			11.6	9.2			15.9	16.0
	説明			13.1	10.4			7.4	7.4
	命令			9.0	7.2			2.8	2.8
	質問			2.2	1.8			2.3	2.3
	その他			1.9	1.6			2.9	2.9
応待	口まね	63.6	50.7	6.4	5.1	55.6	55.9	6.8	6.8
	応答			49.0	39.0			39.6	39.8
	命令			2.1	1.7			1.0	1.0
	情緒的			2.2	1.8			4.0	4.0
	その他			3.9	3.1			4.2	4.2

おとなからの質問に対し、応答することが多くなっている。もちろん、絵本をみるなどの遊びの中で、子ども側から自発的な話しかけもみられ、その頻度は増加しているが、会話のきっかけはおとなの働きかけによって誘導されていることが多い。

第6表のように、伝達の意図をもたない言語の割合は前の時期と比べあまり変化はない。

伝達の意図をもつことばでは、命令・命名などが多いが、この他に、ハヤイ、ブーブパンク、コレオンナジなど、説明の機能をもった言語活動が増加しており、質問が表われはじめて、眼前の事象から離れてもことばが使用されている。

表現のしかたも、ママヤッテ、ミルクチョーダイ（命令）オブノンデル（説明）ナニシテルノ（質問）のように、主語と述語からなる文の形式の表現が表われて、伝達内容が明瞭になってきている。

周囲からの言語的な働きかけに対し、ことばで応じる態度は、さらに積極的になり、よく応答している。おとなからの質問は眼前の事物に対して「これなに」「……はどこ」というものが多いがこのほか、何作るの、誰と行くの、どうやってするの、何色、いくつあるのなど、種々な形式の問いに応答しており、おとなから子どもへ、子どもからおとなへ対話する機会が多くなっている。また、自我の発達に伴なって、相手の働きかけに対し、イヤ、ダメなどの情緒的な反応も増加している。

4）　2才6か月児

理解不可能な言語が減少しており、一般的に通用する形式のことばが使用されていることがわかる。（第7表）

録音場面では遊びに自発的な行動が多くなり、母親相手のごっこ遊び、絵本をみるなどの場面でも自発的な会話が活発になっている。

第7表　聞きての理解度からみた2才6か月児のことば

理解度	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %
理解可能	129.2	98.4	110.4	98.6
理解不可能	0.8	0.6	1.1	1.0
一部理解可能	1.3	1.0	0.5	0.4

第8表　機能別にみた2才6か月児のことば

伝達の機能		男 平均使用頻数	男 %	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %	女 平均使用頻数	女 %
無意図	独語	34.1	26.0	30.7	23.4	11.8	10.6	11.1	9.9
	情緒的			2.9	2.2			0.2	0.2
	その他			0.5	0.4			0.5	0.4
表現	呼びかけ	54.7	41.7	5.4	4.1	48.7	43.5	3.0	2.7
	命名			7.2	5.5			4.0	3.6
	説明			22.2	16.9			16.1	14.4
	主張			1.7	1.3			2.9	2.6
	命令			6.4	4.9			6.9	6.2
	情緒的			1.7	1.3			0.7	0.6
	質問			8.8	6.7			11.8	10.5
	その他			1.3	1.0			3.3	3.0
応待	口まね	42.5	32.4	5.9	4.5	51.5	45.9	3.1	2.8
	説明			2.0	1.5			2.9	2.6
	応答			27.3	20.8			37.4	33.4
	質問			1.8	1.4			4.2	3.8
	その他			5.5	4.2			3.9	3.4

伝達の意図のない言語では、再び独語が増加の傾向をみせているが、内容は1才ころのものとは異なり、子ども自身の行動や意図をことばに出していったり、遊びの状況を叙述したりするなど、自分自身に話しかけながら行動する傾向が表われており、社会的な伝達の手段とはならないが、子どもの思考との結びつきを考えられる言語が表われている。

伝達の意図をもつ言語では、相手からの働きかけに応じるものよりも、子ども側から自発的に表現する言語活動の割合が増加してきており、伝達内容も、1才6か月、2才で大きな位置をしめた命名が減少して説明が大きな割合をしめている。テツジンママントコクルヨ、キータンコンナイッパイモッテルヨのように多語文での叙述ができ、眼前の事象から離れても言語的な伝達が円滑に行なわれる。また、思考交流に重要な役割をもつ質問が多くなり、子どもから親へ、親から子へ、子から親へと対話を楽しむことができる。このほか、ミキチャンガヒトリデフクラマシテミル、ママアトデオンモイッテクルヨのように自分の行動を主張したり、意図を伝えたり、ママガイケナイノと他人の行動を批判するなど、自我の発達、思考の発達を裏づける言語活動が表われている。

応答も前の時期は命名が多かったのに対し説明的な機能が強くなり、母のいうことに対し自己を主張したり、母からの質問に反問したりするなど積極的な態度がみられる。(第8表)

5)　3才児

第10表に示したように、伝達の意図をもたない言語の割合がさらに大きくなり、伝達の意図をもった言語が減少している。これは、子どもの遊びの内容、形式によって規定されている面が強く、子どもの言語活動に対する母親の態度にも影響される点が大きい。すなわち、この時期になると母親は子どもの遊びに積極的に参加するこ

第9表　聞きての理解度からみた3才児のことば

理解度	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %
理解可能	113.9	98.9	96.4	99.0
理解不可能	0.3	0.3	0.6	0.6
一部理解可能	0.8	0.7	0.4	0.4

第10表　機能別にみた3才児のことば

伝達の機能		男 平均使用頻数	男 %	男 平均使用頻数	男 %	女 平均使用頻数	女 %	女 平均使用頻数	女 %
無意図	独語	56.5	49.0	54.6	47.2	25.6	26.3	21.8	22.4
	情緒的			1.7	1.4			3.2	3.3
	その他			0.2	0.1			0.6	0.6
表現	呼びかけ	28.4	24.6	1.0	0.9	44.4	45.6	5.0	5.1
	説明			14.3	12.4			18.2	18.7
	主張			0.8	0.7			3.0	3.1
	命令			5.2	4.5			6.4	6.6
	質問			4.2	3.6			9.8	10.1
	その他			2.9	2.4			2.0	2.0
応待	口まね	30.3	26.4	0.7	0.6	27.6	28.1	2.0	2.1
	説明			1.5	1.3			1.0	1.0
	応答			23.4	20.2			18.4	18.9
	質問			1.3	1.2			1.6	1.6
	情緒的			1.5	1.3			3.4	3.5
	その他			1.9	1.8			1.0	1.0

とが少なく、一人あそび、友だちあそびが増加しており、子どもの発することばにも反応を示すことが少なくなっている。このような条件による差もあり、独語が著しく増加している。特に、男子ではごっこ遊びに伴なっての擬声が大きな割合を占めているが、一方、遊びの中で自問自答したり、遊びの状況を説明したりするなど、子どもの思考力、空想力と関連した独語が増加している。

伝達の意図をもつ言語は、前の時期と同様、説明、質問が多く、説明は主語、目的語、述語を含む叙述が増加している。母親からの質問に対しても説明的な叙述表現が多くなり、「どうして」の問に理由を説明できるようになっているもの、一つの話題から次々と連想して会話するものなどがあり、日常生活での言語的伝達にはほとんど不自由を感じなくなっている。

なお、前の段階までは母親と子どもとの会話が多く、母親に促されて観察者に話しかけるものはあったが、この時期では子ども側から観察者に話しかけるような積極的な態度もみられた。

2. 発達的考察

聞き手が理解不可能な言語は、第11表に示したように1才6か月、2才に多い。これは、子ども自身の構音能力の未発達ということのほかに、ことばを習得する過程で、その初期においては、子どもの発した喃語的な音や、社会的には通用しない形式のことばでも、周囲のおとなたちがことばとしてとりあげ、子どもに向かって使用することにより相互の伝達を図ろうとするためであろう。2才6か月では理解不可能な言語は著しく減少して一般的に通用することばを使用するようになっている。

相手に伝達の意図をもたない言語の割合は1才が最も多く、1才6か月、2才と減少するが以後再び増加する傾向をみせている。(第12表)

1才ではおとなのことばを即時的・機械的に模倣する反響語の割合が多く、これは1才6か月以後は急激に減少し、これに変わって独語が発達に従って増加している。

独語

独語の中に分類してあるブーブー、ガタンガタンなど遊びに伴なって発せられる擬声は、休止により区分してその頻度を数えたが、文形式の独語と異なり、数量的な表示がむずかしいうえに、遊びの内容により影響される面が大きいのでこれを除外して独語の出現をみると、第13表のようになる。年令がすすむにしたがって独語の内容も変化をみせ、1才、1才6か月では要求などの目的で発語したあと反覆してそのことばを発している場合が多く、また、1才6か月、2才では物をもてあそびながら対応的にその名をつぶやき、2才6か月では数を唱えたり、リズムに合わせ、文をくり返したりするなど言語化を楽しみながらことばの学習を助けるような独語がみられる。

第11表 聞き手の理解度からみた言語発達

聞きての理解度＼年令	1；0		1；6		2；0		2；6		3；0	
	平均使用頻数	%	平均使用頻数	%	平均使用頻数	%	平均使用頻数	%	平均使用頻数	%
理解可能な言語	6.8	91.3	41.2	85.1	94.9	84.4	119.8	98.5	106.0	99.0
理解不可能な言語	0.7	8.8	6.3	13.0	12.3	10.9	1.0	0.8	0.5	0.4
一部理解可能な言語			0.9	1.9	5.3	4.7	0.9	0.7	0.6	0.6

第12表 伝達の意図のない言語

機能＼年令	1；0		1；6		2；0		2；6		3；0	
	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%
無意図	5.3	71.1	7.7	15.8	16.1	14.3	22.9	18.9	42.5	39.6
反響語	3.1	41.6	1.4	2.9	1.3	1.2	0.5	0.4	0.4	0.3
独語	2.2	28.9	6.0	12.4	11.7	10.3	20.9	17.2	39.7	37.1
情緒的	0.05	0.7	0.3	0.5	3.1	2.8	1.6	1.3	2.4	2.2

第13表　独　語

年令	1；0		1；6		2；0		2；6		3；0	
	出現頻数	%	出現頻数	%	出現頻数	%	出現頻数	%	出現頻数	%
発音を楽しむ	30	97.0	11	57.9	6	3.3	1	0.3		
遊びに伴なうかけ声					20	11.1	15	4.0	11	4.4
物と対応的に	1	3.0	5	26.3	68	37.8	77	20.4	5	2.0
遊びの状況説明					25	13.9	35	9.3	38	15.1
自分の行動意図をいう					43	23.9	112	29.6	20	8.0
そこに起ったできごとをいう					8	4.4	46	12.2	52	20.7
自分自身の会話					5	2.8	26	6.9	22	8.8
自問自答					3	1.7	15	4.0	60	23.9
その他			3	15.8	2	1.2	51	13.5	43	17.2
計	31		19		180		378		251	
擬声	12		101		53		40		186	

第14表　伝達の意図をもつ言語

機能＼年令	1；0		1；6		2；0		2；6		3；0	
	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%
表現	0.9	11.4	19.7	40.7	36.8	32.7	51.7	42.5	35.6	33.3
呼びかけ	0.2	2.7	6.0	12.2	2.3	2.0	4.2	3.5	2.8	2.6
命名	0.2	2.7	5.2	10.7	13.8	12.2	5.6	4.6	0.8	0.8
説明			1.8	3.6	10.3	9.1	19.1	15.7	16.1	15.0
連想							0.1	0.1	0.5	0.5
主張							2.3	1.9	1.8	1.7
批評							0.4	0.3	0.5	0.5
命令	0.5	6.0	5.8	11.9	5.9	5.2	6.7	5.5	5.7	5.3
情緒			0.8	1.5	0.9	0.8	1.2	1.0	0.3	0.3
質問			0.1	0.2	2.3	2.0	10.3	8.5	6.7	6.3
その他			0.2	0.3	0.2	0.1	1.4	1.2		
不明					1.3	1.1	0.5	0.4	0.3	0.3
応待	1.3	17.4	21.1	43.5	59.6	53.0	47.0	38.6	29.0	27.1
口まね	0.2	2.7	5.0	10.3	6.6	5.9	4.5	3.7	1.3	1.2
命名	0.1	1.3			1.2	1.0	0.4	0.3	0.5	0.4
説明					1.0	0.9	2.5	2.0	1.3	1.2
応答	1.0	12.8	14.5	29.9	44.3	39.4	32.4	26.6	21.1	19.7
質問			0.2	0.3	1.3	1.1	3.0	2.5	1.5	1.4
命令	0.05	0.7	0.1	0.2	1.6	1.4	0.8	0.6	0.5	0.4
主張							1.3	1.0	0.6	0.6
情緒			1.0	2.1	3.1	2.8	1.5	1.2	2.4	2.2
その他			0.3	0.5	0.6	0.5	0.9	0.7		

第15表 命 令 文

年令	1；0		1；6		2；0		2；6		3；0	
	出現頻数	%	出現頻数	%	出現頻数	%	出現数頻	%	出現頻数	%
対象語	9	100.0	88	76.0	68	46.0	16	10.8	5	7.4
動（副）詞			19	16.3	25	16.9	32	21.6	26	38.2
呼びかけ＋対象語			2	1.7	1	0.7	3	2.0		
呼びかけ＋要求語			1	0.9	7	4.7	16	10.8	8	11.8
対象語＋要求語			5	4.3	32	21.6	35	23.6	16	23.5
呼びかけ＋対象＋要求語					2	1.3	14	9.5	5	7.3
理由をのべて要求							1	0.7	3	4.4
禁止			1	0.9	8	5.4	24	16.2	4	5.9
許容					5	3.4	3	2.0	1	1.5
威赫							4	2.7		
計	9		116		148		148		68	

2才、2才6か月では自分の行動や意図をことばに出していったり、2才6か月、3才ではそこに起こったできごとについて叙述したり、3才では空想力を働かせながら遊びの状況を叙述したり、自問自答するなどの独語が目立っている。このような独語は、自己中心的な言語ではあるが、子どもの思考と強い関連をもっており、遊びを発展させる働きをもつものである。

相手に表現・伝達の意図をもつ言語、および相手からの話しかけに応待する言語の割合は発達により一定の傾向をみることはできなかった。これは、録音場面の条件を一定に保つことが困難であって、母親により、また場面に参加した家族の多少によっても、子どもへの働きかけかた、子どものことばのうけとめかたにかなり差がみられることも一因となるであろう。しかし、1才、1才6か月、2才の段階までは子ども側からの自発的な発語に比し、相手からの働きかけに応待することばが多いのに対し、2才6か月、3才の段階では逆に自発的な発語の割合が増加しており、発達にしたがって、より積極的な言語活動が可能になることを示している。（第14表）

相手に対し子ども側から自発的に表現、伝達しようとする意図をもつ言語は、1才、1才6か月では命令、呼びかけが多く、1才6か月、2才では命名が増加し、2才以後は説明が、2才か6月以後は質問がそれぞれ増加をみせている。

命令

伝達の機能をもつ言語活動として命令は最も早期に表われている。命令の機能をもつことばの発達をみると、第15表のように、初期は要求の対象となる事物の名をいう形式が多いが、これは2才以後次第に減少していき、ついで要求語として、動詞、副詞の使用が始まる。1才6か月ではチョーダイ、ナイナイなどが使われ、2才では、ミテ、トッテ、ダシテ、ヨンデなど、動詞＋助詞（テ）の形式の表現が多く、2才6か月では意志、願望の助動詞の使用がみられて、要求表現が巧みになっている。オウチツクッテのように対象語と要求語が結びついた形式、パパトッテチョーダイのように呼びかけと要求語が結びついた形式の表現は1才6か月以後にあらわれて、発達にしたがって増加している。命令の形として一応完成したとみられる、呼びかけ、対象語、要求語の結びつきは2才以後にみられ、3才では理由を説明して命令するものが表われている。シテハイケナイ、キチャダメなどの禁止は2才6か月段階に最も多く、自我の発達との関連を考えることができる。

命名（指示）

事物を指示しながらその名をいう、命名の機能をもつことばは、子どもが物の名を習得する1才6か月、2才の段階で多くあらわれている。この機能は、子ども側から自発的に表現されることもあるが、母親からの働きかけで促されることが多く、「これなーに」の質問の応答としてあらわれる頻度が高い。眼前の事象を介して言語的伝達が行なわれる段階に多いが、眼前の事象から離れて会話が行なわれるようになるにしたがい減少している。

説明

説明の機能をもつことばは1才6か月から使用され始めている。ボールがころがって行ったのをみて、アッチ

イッチャッタのように眼前の事象に対する簡単な叙述的表現や、大キイ、ジョウズ、アブナイなど一語文による状態の表現がある。2才になると主語・述語からなる文形式の叙述表現が目立って増加しており、ボートノッタ、キャラメルタベチャッタ、ハガイタイ、オクツオカシイ、コレオンナジ、ニューニューコワイ、ココニハイッチャウなど、過去、完了、感覚、批評、比較、情動、意図などについて、眼前の事象から離れても伝達することが可能になっている。2才6か月以後では、ヒデチャンガブランコノッテンノ、オニイチャンノクレヨン12ショクダヨのような多語文や、ミカオオキクナッタラヨメルナのような複文があらわれており、さらに具体的な、詳細な叙述表現による言語的伝達が可能になっている。

質問

質問は対人関係における言語的伝達のなかで最も積極的な形式のものであり、思考交流のため重要な役割をもつものである。したがって、質問があらわれるということは、子どものことばの発達にとって大きな指標となることがらであると考えられる。第16表に示したように、質問の形式が最初に表われているのは1才6か月であって、エッ？、ウン？などのきき返しや、尻あがりのイントネーションで、コレハ？、ガーガ？という形であらわれている。しかし、第17表に示したように、おとなの積極的な応答を求めているものは僅かに2回だけである。この場合も母親から再び反問されて子どもが応答しており、疑問代名詞ナニ？の使用もきき返しにすぎず、いずれも質問の形式になっているが、情報獲得のための手段とはいえない。したがって真の質問とはいい難いが、ことばを介しての対人交渉の深まりを示すものであろう。

2才段階での質問は語尾の抑揚をあげて、イントネーションで質問を表わす形式のものが最も多いが、疑問詞の使用が増加しはじめる。最も使用頻度が高いものは、物の名を尋ねる「コレナニ？」であり、ドレ？、ドコ？ダレ？がこれについでいる。この時期の質問には情報獲得の手段としての質問のほかに、親の支持や同意などの反応を求めるものが多い。

2才6か月段階では、「コレナニ？」のほか、ドコ？ドッチ？など場所をきいたり、指示を求めたりする質問が増加しており、遊びの場面で「コレイクラ？」などが使用されている。

3才では独語での質問が増加し、質問をなげかけてはいるが必ずしも相手の応答は求めておらず、子ども自身

第16表　質問の形式

質問の形式 ＼ 年令		1；6 出現頻数	1；6 %	2；0 出現頻数	2；0 %	2；6 出現頻数	2；6 %	3；0 出現頻数	3；0 %
きき返し		4	50.0	11	13.2	46	13.8	13	9.0
語尾の抑揚をあげる		3	37.5	42	50.6	169	50.6	44	30.4
疑問助詞の使用				6	7.2	32	9.6	51	35.1
疑問詞の使用		1	12.5	24	28.9	87	26.0	37	25.6
疑問詞の内容	物	1	100.0	18	75.0	49	56.3	16	43.2
	場所			4	16.7	22	25.3	16	43.2
	人			2	8.3	7	8.1	4	10.8
	状態					1	1.2	1	2.7
	量					8	9.2		
計		8		83		334		145	

第17表　質問の種類

質問の種類 ＼ 年令	1；6 出現頻数	1；6 %	2；0 出現頻数	2；0 %	2；6 出現頻数	2；6 %	3；0 出現頻数	3；0 %
きき返し	5	62.5	11	13.2	42	12.6	14	9.7
同意求め	1	12.5	22	26.5	64	19.1	16	11.0
質問	2	25.0	44	53.0	206	61.7	75	51.7
独語			6	7.2	22	6.6	40	27.6

第18表　応答の内容

応答内容＼年令	1；0		1；6		2；0		2；6		3；0	
	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%	平均出現頻数	%
あいずち	0.3	31.6	3.5	23.9	11.0	24.7	11.2	34.5	7.8	37.1
ロまね			0.2	1.0	1.9	4.3	1.7	5.3	1.3	6.0
命名	0.7	68.4	9.1	62.6	20.9	47.2	7.9	24.4	3.1	14.7
説明			1.7	11.8	10.0	22.5	11.4	35.3	8.6	41.0
その他			0.05	0.3			0.2	0.5	0.3	1.2
不明			0.05	0.3	0.6	1.4	0.05	0.2		

の思考内容の言語化という形のものがあらわれている。これに伴なって疑問の助詞カナの使用が目立っている。

応待

言語的な応待は、母親の質問によって促される応答の割合が各年令段階を通じて最も多く、特に、1才6か月から2才6か月にかけて多い。このほか、母親の要求にしたがって親のことばを模倣するロまねは1才6か月、2才に多い。(第14表)

応答の内容は、母親の質問の形式と関連しているが、第18表に示したように、自発的な言語活動の場合と同様に発達にしたがい命名から説明へ移行している。

3.　こどもの言語活動に対する親の態度

こどものことばの発達に伴なって、応待するおとなの言語的な態度に変化がみられることは経験的に認められることであるが、この変化を具体的に把握したいと考えて、試みに、調査対象児の中から言語活動の面で平均的な発達を示している子どもを各年令段階から1名選び出し、親の態度を分析した。

母親側からの言語的な働きかけを、質問、要求、その他、応答に分類して、その頻度およびそれぞれの占める割合をみたが、母親からの働きかけの度合、応答の度合は、親のパーソナリティーや、遊びの場面によって非常に差が大きいようであった。(第1図)

〔1才児 N.S. の場合〕　こっちおいで、ちょうだい、これあげる、いけません、バイバイなど、子どもに動作での反応を要求する言語的な働きかけが多く、質問がこれについでいる。質問には、「これなに」、「どこいくの」、「それ誰の」などがあり反覆して働きかけられているが、子どもの発達のレベルからみても必ずしも言語的な応答を期待しているわけではなく、また、子ども側から有意味語的な応答があったのは僅かに1度だけである。しかし、応答のない場合も、話しかけに対して喃語的な発声での反応がみられることが多く、子どもの応答的な発声を促すとともに、ことばを介して相互交渉をもつ手段となっている。

応答の場合も、成人相互の談話の場合とはまったく性質が異なり、自然の応答の中に教育的な意味あいが強い。すなわち、子どもの非言語的な行為や、喃語的発声に対しても、「ないないしょうね」、「こわれちゃったよ」「ありがとう」など即応的に、積極的な応答を与えており、喃語的発声のブーに対しても、「ぶーぶいっちゃった」、「のりちゃんのぶーぶは？」、のように有意味的にとりあげ反覆して応じている。僅かに表われている有意味語については、子どものことばをそのままくり返し模倣応答をしている。

これらのことから、この段階での親の態度には、言語の理解をすすめ、有意味的な発声を促すとともに、子どもの発声を有意味語として位置づけようとする傾向がみられる。

〔1才6か月児T.K.の場合〕　ことばを覚えはじめ語彙が増加していく時期にあるため、母親は玩具や絵本を示して質問により働きかけて子どもの発語を促し、子どもの発したことばに対しては積極的に応答しこれを受けとめている。質問は「これなに」という形式が多く、他に「どうして」、「どうするの」などがあるが、充分にコミュニケートしているとはいえない。

子どもの発語に対し応答した割合は76%であり、高率を示している。特に、子ども側からの自発的な発語に対してはすべて応答している。

応答の内容は、子どものことばをそのままくり返す模倣応答が最も多く、他に、「アップ」に対し「アトム」、「メーン」を「山羊さん」、「トット」を「金魚さん」のように子どもの発音やことばを修正してくり返す修正模倣や、「ブランコ」に対し、「ブランコね。ブランコゆれる。ブランコいったのね」など文中に入れ反覆してくり返すとか、「アッチ」に対し、「おんもいくのね」と子どものことばの意味を拡大して反応するなど、子どもの発語を促し、語彙を拡大しようとする態度がみられる。

〔2才児T.M.の場合〕 母親からの質問がさらに多くなり、質問により発語を促している。質問によって誘い出された子どもの応答に対してはあいずち、模倣などで応じているため応答の割合の増加がみられる。

遊びは絵本場面であって、母親が絵をさして「これなに」と質問していることが多いが、「パパはどこいった」「何してるの」「どうして」などの眼前の事象から離れた質問もある。

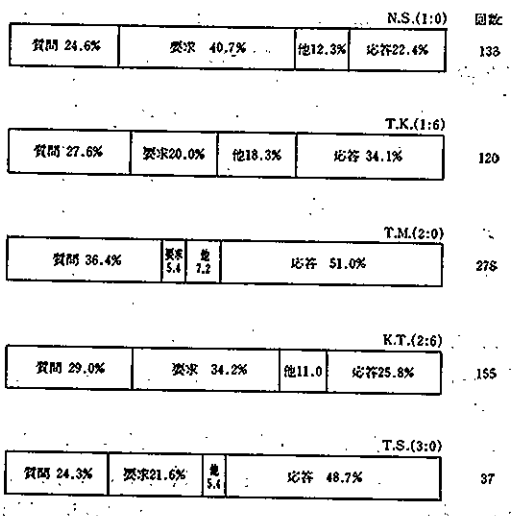
子どもの発語に対する母親の応答率は57%であるが、この場合も子どもから自発的に発せられたことばに対してはことごとく応答している。応答の内容は、うん、そうなどのあいずちと模倣が最も多く、「メンメ」に対し「めがね」のように幼児語に対し成人語で修正模倣したり、「ピョンピョン」に対し「ピョンピョンだっこして」、「オジチャン」に対し「おじちゃんもいっしょに」のように子どものことばに語を補充して模倣する拡充模倣もみられ、語彙を拡大するとともに、子どもの言語活動を語から文へひきあげようとする態度がみられる。

〔2才6か月児K.T.の場合〕 母親の言語的な働きかけでは要求が増加し、応答が減少している。これは遊びの場面がごっこ遊びであり、母親が子どもの遊びをリードしているため場面の違いによるものであろう。

母親からの質問は眼前の事象から離れたものが多く、「いつも誰と遊ぶ」、「何の歌知っている」、「テレビで何をみるの」などがある。

子どもの発語に対する母親の応答率は44%に減少しているが、子ども側から自発的に表現されたことばに対しては、ほとんどの場合積極的な応答を与えており、僅かに「ママオソトデアソビタイ」などその場面で受け入れにくい要求を無視しているにすぎない。

第1図　母親の言語的な働きかけ



応答の内容は模倣、拡充模倣があるが、「ママモヤッテ」に「はいやりましょ」、「モウイッパイダヨ」「いつぱいの時はこの上にやるのね」、「ナイヨ」「あるわよ、これでしょ」「ミッツデス」「きいたんみつっなの、おかしいわね」など、積極的な応答をして、子どもの伝達内容の誤りを訂正したり、内容が充分でない場合に反問などでさらに促す傾向がみられる。

〔3才児T.S.の場合〕 子どもは絶えずしゃべりながら一人遊びをしているが、相手に話しかけるというよりも言語化を楽しんでいる様子が強い。母親は子どもから「オカアチャンミテ」「コレナーニ」など要求や質問の

第19表　母親の応答

応答内容＼対象児		N. S. (1;0)		T. K. (1;6)		T. M. (2;0)		K. T. (2;6)		T. S. (3;0)	
あいずち		3	10.0%	3	7.3%	45	31.8%	8	20.0%	3	16.7%
模倣		4	13.3	18	44.0	46	32.4	8	20.0	4	22.2
修正模倣	噛語	6	20.0								
	発音			4	9.8	7	4.9				
	ことば			2	4.9	9	6.4				
拡充模倣		2	6.7	3	7.3	13	9.2	4	10.0		
反問				4	9.8	7	4.9	9	22.5	5	27.8
その他		15	50.0	7	17.1	15	10.6	11	27.5	6	33.3
応答合計		30		41		142		40		18	
子どもの発語回数		8		54		248		92		110	
応答率				76%		57%		44%		16%	

あった時には応答するが、子どもの発語について、いちいち反応を示すことはなく、応答率は16%の低率を示している。

応答は、子どものことばを疑問調で模倣したり、積極的に質問を返して反問することが多い。

質問、要求、応答など母親からの、すべての働きかけが少なくなって、子どもの言語活動に対する教育的な態度が減少している。

それぞれの母親の言語的な働きかけの割合、および応答内容を表示すると第1図、第19表のとおりである。

なお、子どもの言語的伝達の意図と文の長さの関係をみたのが、第20表である。表にみられるように、子どもの言語活動を伝達の意図がない場合、自発的に表現、伝達しようとする意図のある場合、相手のことばに応待する場合にわけてみると、自発的に表現しようとする意図のある場合に最も長い文を話し、相手からの話しかけに応待する場合には文の構成が短かくなっており、これは、各年令段階を通して共通した傾向である。このことからみて、子どものことばの指導には、おとなから働きかけて応答させるよりも自発的に話そうとする意図を強めていくことが重要なこととなろう。

第20表　伝達の意図と文の長さ

伝達の意図＼年令	1;0	1;6	2;0	2;6	3;0
無意図	1.0	1.06	1.50	2.24	2.78
表現	1.0	1.12	1.71	2.79	3.22
応待	1.0	1.03	1.22	1.94	1.79

（文の長さは1文を構成する品詞数であらわす）

要　　約

1）1才、1才6か月、2才、2才6か月の幼児各20名と3才の幼児11名について、録音による方法を用い言語発達の状況を対人関係における伝達機能から調べた。

2）1才では言語による伝達機能は極めて不充分であり、反響語、独語の割合が大きい。

3）1才6か月では眼前の事象を介して、命令、命名の機能をもった自発的な言語活動および相手からの話しかけに対する命名による応答が可能になる。

4）2才では命令、命名のほか叙述表現による説明が可能になり、眼前の事象から離れて言語的伝達が行なわれる。

5）2才6か月では自発的な表現、伝達の意図をもつ言語の割合が増加し、伝達内容では命名が減少し、これに変わって説明、質問の増加がみられ、言語活動の積極化がみられる。

6）3才では独語の割合が増加して、子どもの思考内容の言語化がみられる。

7）相手に伝達の意図をもたない自己中心的言語の割合は1才に多く次第に減少するが2才6か月以後再び増加している。1才に多い反響語に変わり1才6か月以後は発達にしたがって独語が増加する傾向を示しており、内容も初期の発音を楽しむ形のものから語の学習や思考を助けるものに移行している。

8）自発的な表現意図をもつ言語は、応待する言語とくらべ2才6か月以後はその割合が増加している。

9）相手の話しかけに応待する言語活動では質問に答える応答が各年令段階を通じ最も多い。

10）子どもに対する母親の言語的な働きかけは、母親のパーソナリティーや遊びの種類によって大きな差があるが、子どもの年令が低いほど子どもの発語に対して積極的な応答をする傾向がみられる。

11）母親の応答には自然の中に発音やことばを修正したり、語を補充したり、伝達内容の誤りを訂正するなど教育的な意味あいが強い。

Study on the Development of Speech and Language of Children

Dept. 5　Takeko Mochizuki
Akiko Maruo

1) Speech and language development of 20 children ranging in age of 1 : 0, 1 : 6, 2 : 0, 2 : 6 years and of 11 children of 3 years old was studied from the standpoint of communicatory function in personal relations.

2) At the age of 1 year, communicatory function is imperfect. The rates of echoic responses and soliloquy are high.

3) At the age of one and a half year, the children show the ability of spontaneous linguistic activity naming and calling upon the adults to do something through the things they see before them and responding to the talker by naming the things.

4) At 2 years of age, children become able to describe and communicate about the things they can't see before them.

5) At 2 and a half years of age, spontaneous expression and words with communicative intention increase. In place of the naming activity, such progressed linguistic activities as explaining and asking a question increase.

6) At the age of 3 years, more soliloquys appear, indicating the verbalization of children's thoughts.

7) Self-centered words with non-communicative intention that appear most at the age of 1 year gradually decrease, but increase again after the age of 2 and a half years. Soliloquy tends to increase in place of echoic response after the age of one and a half year as the child develops. Soliloquy changes from the early form of enjoying the pronunciation to the form of acquiring words and developing thoughts.

8) Spontaneous speech with communicative intention increase after 2 and a half years of age comparing with the respondent speech.

9) In the linguistic activity of responding to the talker, the activity of answering a question appears most throughout all stages of age.

10) Linguistic stimuli given to the children by the mothers differ greatly according to mother's personality and the kinds of play the children chose. The younger the children, the more actively the mothers tend to respond to the children's verbalization.

11) In responding to the children, the mothers indicate educative significance, very naturally correcting pronunciation, vocabulary, communicated matters and supplying some words.